

## 白鷗大生と取り組んだ 「栃木かるた」づくりの実践報告

—小学校社会科身近な地域（郷土）に関する学習の指導力育成をめざして—

原 口 美貴子<sup>1</sup>

### 1. はじめに

地域を代表するような自然や歴史、産業、文化などを詠んだ郷土かるたは、これまでに日本各地で2000以上制作されてきた。栃木県内では「下野かるた」（1981年、県文化協会制作）を含む34種が確認されている<sup>(1)</sup>。

郷土かるたは遊びながら自然にその地域を代表するような事象を学べるのが最大の魅力で、小学校社会科身近な地域（郷土）に関する学習の指導力育成の観点から、筆者はこれまで群馬大学を拠点に、20年以上にわたって郷土かるたづくりを行ってきた<sup>(2)</sup>。2013年に白鷗大学兼任講師として着任してからは、担当講義およびゼミナールの受講生らとともに、白鷗大学が所在する小山市を制作対象にした「小山かるた」を完成させた。その実践内容については白鷗大学教育論集第9巻第2集で報告したとおりである<sup>(3)</sup>。その後、制作対象地域を栃木県に広げ、2015年と2016年の2か年かけて「栃木かるた」を完成させた。小稿ではこの「栃木かるた」について、その制作過程、完成させた読み札・絵札、学生の感想および活用事例等の実践報告を行いたい。

---

<sup>1</sup> 白鷗大学教育学部非常勤講師  
e-mail: msmiki@fc.hakuoh.ac.jp

## II. 「栃木かるた」の制作過程

「栃木かるた」は、2015年度と2016年度の学部講義「社会科概説II」（前期開講科目、選択履修）受講生と筆者のゼミナールに所属する学生とともに、読み込む題材の現地フィールドワークを行いながら完成させた。本講義は教科内容に関する科目なので、その中で現地フィールドワークや演習的な活動を取り入れることは適切かという指摘があるかもしれない。しかし、小学校学習指導要領において社会科の各学年目標は、理解に関する目標、態度に関する目標、能力に関する目標の3系統で構成されていることを鑑みると、教師はこの3つの目標を統一的に達成できるよう指導計画を立てていかなければならない。したがって、教科内容に関する科目ではあるが、フィールドワークや郷土かるたづくりのような演習的な活動を取り入れることも、将来教職を目指す学生にとって社会科の教科理解において重要な意味があると考えた。また、次期学習指導要領から本格的に導入される、いわゆるアクティブラーニングの視点からも、社会科学習、とりわけ地理的学習におけるフィールドワークの重要性が指摘されていることから<sup>(4)</sup>、教職課程を置く大学において郷土かるたづくりに取り組む意義は大きいと考えている。

以下、「栃木かるた」の制作過程について、年度別にその実践概要を記す。

### 1. 2015年度の実践概要

#### (1) 「社会科概説II」における制作

「社会科概説II」受講生は児童教育学科専攻学生130名であった。4月から5月にかけて、身近な地域（郷土）の教育的意義や調査手法について講義し、6月以降文献調査やフィールドワークを含む題材研究、題材研究発表会、札づくりを実施し、最終回の授業で完成させた札を用いた競技体験を行った。

郷土かるたづくりにあたって考えたのは、130名もの受講生一人一人が

意欲的、主体的に取り組み、それぞれの学びの成果を共有しながら、身近な地域（この場合は栃木県）の認識を深めていくには、どのような進め方が最適であるかであった。熟慮した結果、クラス別活動を取り入れた。白鷗大学の児童教育専攻はAからEの5クラスに分かれている。本講義の受講生は、Aクラス25名、Bクラス20名、Cクラス30名、Dクラス26名、Eクラス29名と比較的人数差が少なかったため、各クラスそれぞれの「栃木かるた」をクラスメートの総力で制作し、その成果を全体で共有するという進め方を取ることにした。

郷土かるたづくりの第一歩は題材選びである。栃木県内の題材なら何を選んでもいいわけでない。郷土かるたづくりを通して社会を構成している諸機能に気づかせるとともに、小学校社会科における身近な地域（郷土）の学習内容としてふさわしいものに目を向けさせる必要がある。そこで、筆者は題材選びの観点として、峰地光重が提示した郷土かるた作りの題材分類<sup>(5)</sup>や現行学習指導要領の内容等に基づき、以下の7つを設定した。

- ①県内の特色ある自然（地形、気象、名勝、景観地等）
- ②県内の特色ある歴史（社会的、文化的に活躍したゆかりの人物）
- ③県内の特色ある歴史（史跡・旧蹟）
- ④県内の特色ある交通・産業（農林水産業、工業、サービス業）
- ⑤県内の特色ある文化（祭り・イベント）
- ⑥子どもや市民生活に関わる県内の特色ある公共政策、公共施設
- ⑦県が全国NO.1を誇るもの

この7つの分類から、各自がかるた化したい題材を予備調査し、各クラス内で題材分類が重複したり偏ったりしないよう、1人につき担当題材を1つ決め、講義時間外の学習課題として文献調査及びフィールドワークを実施した。

題材については、須賀神社と宇都宮餃子が4クラスから、足利フラワーパークと日光東照宮が3クラスから、思川、思川桜、殺生石、渡良瀬遊水地、足利学校、下野国分寺(跡)、両毛線、おやまサマーフェスティバル、

とちおとめ、しもつかれ、ジャガマイタ、宮祭りが2クラスから選ばれた。これらは、観光地や名物として全国的に知名度の高い題材や白鷗大学の所在地小山市で親しまれている題材である。そのため、複数のクラスから選定されたものと考えられる。

題材分類については、CとDクラスは7つの分類すべてから選定したが、AとBクラスには⑥がなく、Eクラスには⑦がなかった。この理由については、それぞれ具体的な題材が思いつかなかったか、思いついたとしても実際のフィールドワークを想定した際、何らかの理由で実施に困難があると判断したためと推測される。また、全クラスを総合すると、①が24題材、②が9題材、③が35題材、④が25題材、⑤が18題材、⑥が14題材、⑦が6題材選ばれた。この中で一桁と少なかったのは②と⑦である。⑦は栃木が全国No.1を誇るものなので、数字として表れた全国一を多くあげることは難しいだろう。気になるのは、②県内の特色ある歴史（社会的、文化的に活躍したゆかりの人物）の9題材である。そのうち、具体的な人物名であげられているのは、那須与一、歌川広重、松尾芭蕉、二宮尊徳の4題材である。ほかの5題材は②という分類で選定したにも関わらず、人物名でなく史跡名（足利学校、宇都宮二荒山神社、須賀神社、殺生石、日光東照宮）をあげている。その理由について、これらを選んだ学生に聞くと、「人物名を出しても栃木県との関係が分かりにくいと思ったので、著名な史跡名をあげた」ということである。それにしても、栃木県にはこの9題材以外にも身近な地域（郷土）の学習上相応しい歴史的人物が存在するが、今回一桁しかあがらなかったのは、歴史的人物に対する関心の薄さか、教材研究としての予備調査不足が考えられよう。

題材所在地について多い順にあげると、小山市42題材、宇都宮市17題材、栃木市14題材、足利市11題材、日光市10題材、県全体6題材、那須塩原市4題材、複数市町4題材、佐野市3題材、下野市3題材、真岡市2題材、那須町2題材、大田原市2題材、芳賀町2題材、壬生町2題材、鹿沼市1題材、上三川町1題材、那珂川町1題材、野木町1題材、益子町1

題材、矢板市1題材であった。所在地別に見た学生の選定条件としては、白鷗大学の所在地小山市で親しまれている題材、移動のための公共交通手段があってフィールドワークがしやすい題材のようである。県内25市町の中で1題材もあがらなかったのは、さくら市、那須烏山市、茂木町、市貝町、塩谷町、高根沢町の2市4町であった。これらの市町は公共交通手段が乏しく、学生にとってフィールドワークに行きづらい場所である。しかしながら、社会科における身近な地域の学習教材として郷土かるたを作成する場合、対象地域全体の社会的事象をカバーしていることが学習内容上好ましいので、これらの6市町から地域的特色を表す題材を選定させることを次年度の課題とすることにした。

フィールドワーク先については、図書館、自治体、観光協会、関係施設、関係者・関係団体等多岐にわたった。

フィールドワーク後は、題材研究プレゼンテーション、題材研究レポートおよび読み札・絵札（各札のサイズは9×6.1cm）の作成提出を行い、完成させた札を使った競技体験で終了した。題材研究レポートには、題材調査に使った文献資料・Webサイト、題材の地理的特徴・歴史的特徴・社会文化的特徴、フィールドワーク報告（実施日、場所、感想）、この題材をかるたにした場合の解説文案（140～150字程度）、この題材をかるたにした場合の読み句案（七五調もしくは五七五調で作成）、この題材を絵札化する際モチーフにしたい写真・画像等を記入させた。実際の読み札・絵札は130組もあるので、紙幅の都合上省略する。

## （2）ゼミナールにおける制作

2015年度後期、筆者が担当するゼミナールにおいて、所属の3年生全7名とともに、前期「社会科概説Ⅱ」の受講生が制作した「栃木かるた」の札全130組の中から44組を精選・補作した完成版「栃木かるた」づくりに取り組んだ。しかし、実際に完成させたのは約半分の読み札と絵札、全21組だった。その理由として、当初は44組の完成版を作る計画であった

が、夏季休業中の9月に行う予定だった題材精選会議が関東・東北豪雨により中止になり、制作開始が後期の初回ゼミに繰り下げになったからである。また、白鷗大学教育学部は3年時後期に教育実習を課しているが、実習に行く期間が異なる。そのため、ゼミ生全員が出席のもと行いたい作業と、全員が出席できなくても行える作業を整理して計画を練り直した結果、2015年度は完成版「栃木かるた」の札の約半分である21組を制作することにした。そして、残り23組は2016年度に制作することにした。

札の精選・補作の条件は、社会科教育ゼミということで、「小学校学習指導要領社会及び同解説の内容に関わる題材、日本各地や世界とのつながりが探究できる題材、持続可能な社会の担い手としての資質・能力が養えるようなもの」とした。ゼミ生は7人いるので1人につき3題材を選定させ、念入りな文献調査を行わせた後、フィールドワーク計画を立てた。第1表はゼミ生とともに選定した21の題材とフィールドワーク先である。

第1表 2015年度後期ゼミナール選定  
完成版「栃木かるた」の題材及びフィールドワーク先一覧

題材名	分類番号	題材所在地	フィールドワーク先
オオルリ	①	栃木市	なし
渡良瀬遊水地	①	栃木市	渡良瀬遊水地
藤の花	①	足利市	足利フラワーパーク
鬼怒川温泉	①	日光市	なし
須賀神社	②	小山市	須賀神社
二宮尊徳	②	真岡市	二宮尊徳資料館
松尾芭蕉	②	野木町、小山市、日光市、大田原市、那須町	日光東照宮
下野国分寺	③	下野市	下野国分寺跡
大谷観音	③	宇都宮市	大谷寺、大谷石資料館
日光東照宮	③	日光市	日光東照宮
足利学校	③	足利市	足利学校
結城紬	④	小山市	結城紬ミュージアムつむぎの館
佐野ラーメン	④	佐野市	佐野市内ラーメン店
日光湯波	④	日光市	日光東照宮門前町
栃木生乳	④	栃木市	大笹牧場日光直営売店他
益子焼	④	益子町	益子焼陶芸センター

真岡木綿	⑤	真岡市	真岡木綿会館
しもつかれ	⑤	栃木県	なし
宮染め	⑤	宇都宮市	栃木県立美術館
宇都宮餃子	⑦	宇都宮市	餃子のみんな
とちおとめ	⑦	栃木県	なし

21の題材のうち、時期やルート、訪問先の事情でフィールドワークが実施できなかったのは、オオルリ、しもつかれ、とちおとめだった。また、鬼怒川温泉は白鷗大学入学時オリエンテーションで全員訪れているため省略した。フィールドワークは教育実習日程の都合上、全員一斉でなくグループに分かれ、10月～11月内の全3日間行った（第2表）。

第2表 2015年度後期ゼミナールフィールドワーク実施表

<p>10月10日（土）県中央・北部方面 ゼミ生4名と教員1名で実施              8：30 JR小山駅西口集合→車移動→下野市下野国分寺跡→車移動→宇都宮市大谷石資料館→車移動→宇都宮市宇都宮美術館（宮染め展）→車移動→JR宇都宮駅→電車移動→JR日光駅下車→バス→西参道下車、日光市日光東照宮及び芭蕉の句碑→門前町を徒歩で移動→JR日光駅→電車移動→JR宇都宮駅下車、餃子のみんな、21時頃解散</p>
<p>11月21日（土）県東部方面 ゼミ生2名と教員1名で実施              9：00 JR小山駅西口集合→車移動→真岡市真岡木綿会館→車移動→真岡市二宮尊徳資料館→車移動→益子町益子焼窯元共販センター→車移動→JR小山駅、20時頃解散</p>
<p>11月22日（日）県東西方面 ゼミ生3名と教員1名で実施              8：15 JR小山駅西口集合→車移動→小山市須賀神社→車移動→結城市結城紬ミュージアムつむぎの館→車移動→栃木市渡良瀬遊水地湿地資料館→車移動→渡良瀬遊水地→車移動→足利市足利学校→車移動→足利市足利フラワーパーク→車移動→佐野市内ラーメン店→車移動→JR小山駅、21時頃解散</p>

3日間のフィールドワークは移動距離が大きく、朝から夜までタイトなスケジュールであったが、7人のゼミ生は質の高い札づくりに向けて大変意欲的に行動した。各訪問地で関係者や解説ボランティア等から話を聞いたり、真岡木綿や結城紬、益子焼については体験したりして、精選した21の題材の教材的価値を再発見・再確認した（第1図）。



第1図 2015年度後期ゼミナールフィールドワーク写真一部  
 (左から大谷寺、結城紬織物体験、ぎょうざ焼制作体験)

その後、フィールドワークの成果を生かして前期「社会科概説Ⅱ」で制作された該当の読み句と絵札原画を補作し、読み札の裏に記載する100字解説文を新たに作った。第3表がその読み句一覧である(実際の読み札には漢字にふりがなを付した)。絵札と解説文については、後掲する完成版「栃木かるた」と重複するので省略する。

第3表 2015年度後期ゼミナール作読み句一覧(五十音順)

頭	読み句	題材名	分類番号	題材所在地
あ	朱神輿 家康公の 戦勝記る	須賀神社	②	小山市
い	今もまだ 陣屋に遺る 報徳仕法	二宮尊徳	②	真岡市
か	絹くくり 亀甲柄に 魂込め	結城紬	④	小山市
き	餃子の味は 地産地消の たねが生む	宇都宮餃子	⑦	宇都宮市
く	国史跡 天平伝える 国分寺	下野国分寺	③	下野市
け	ケーキを彩る 深紅の舞姫 とちおとめ	とちおとめ	⑦	栃木県
さ	佐野ラーメン 青竹使った しょうゆ味	佐野ラーメン	④	佐野市
し	初夏迎え 渓流に響く オオルリの唄	オオルリ	①	栃木市
せ	千本の 手で見守る 大谷観音	大谷観音	③	宇都宮市
た	大温泉 いのちを守る 遊水地	渡良瀬遊水地	①	栃木市
で	伝統を 今につなげる 白の晒し	真岡木綿	⑤	真岡市
と	栃木道 足跡刻む 芭蕉の句碑	松尾芭蕉	②	野木町、小山市、日光市、大田原市、那須町
な	七色の味 病魔を払う しもつかれ	しもつかれ	⑤	栃木県
に	日光の 栄養豊富な 湯波商品	日光湯波	④	日光市
ふ	藤の花 世界で一番 美しい	藤の花	①	足利市
へ	平和を願う 東照宮の 動物たち	日光東照宮	③	日光市
ほ	本州一 自然が生み出す 栃木の生乳	栃木生乳	④	栃木市

み	宮染めの 後世につなぐ 美しさ	宮染め	⑤	宇都宮市
れ	歴史ある 日本最古の 学問所	足利学校	③	足利市
ろ	ろくろを回し 技術を培う 益子焼	益子焼	④	益子町
ゆ	豊かな自然 再生してゆく 鬼怒川温泉	鬼怒川温泉	①	日光市

## 2. 2016年度の実践概要

### (1) 「社会科概説Ⅱ」における制作

2016年度の社会科概説Ⅱ受講生は児童教育学科専攻学生60名であった。前年同様、4月から5月にかけて、身近な地域（郷土）の教育的意義や調査手法について講義し、6月以降文献調査やフィールドワークを含む題材研究、題材研究発表会、札づくりを実施し、最終回の授業で完成させた札を用いた競技体験を行った。

前年度は受講人数が130と多かったので、AからEまで5つのクラスそれぞれの「栃木かるた」を制作するという進め方をとったが、2016年度は前年度の約半分の人数だったので、全員で1つの「栃木かるた」を制作することにした。前年度示した郷土かるたの7つの題材分類に基づき、まずクラス別に担当する題材を決めさせた。結果、Aクラス10名が④県内の特色ある交通・産業（農林水産業、工業、サービス業）を、Bクラス24名が③県内の特色ある歴史（史跡・旧蹟）と⑤県内の特色ある文化（祭り・イベント）を、Cクラス14名が①県内の特色ある自然（地形、気象、名勝、景観地等）と⑦県が全国NO.1を誇るものを、Dクラス8名が⑥子どもや市民生活に関わる県内の特色ある公共政策、公共施設を、Eクラス4名が②県内の特色ある歴史（社会的、文化的に活躍したゆかりの人物）を担当することになった。そして、予備調査を行わせた後、各クラス内で重複しないよう一人1題材を選定させた。その後、講義時間外の学習課題として文献調査及びフィールドワークを実施した。

選定された題材について、2016年度は分類別にクラスに担当させたので、異なる分類で同じ題材が選ばれることはないだろうと予測したが、まちの駅（思季彩館）と真岡鐵道の2種については、Aクラスの学生が④の

観点から、Dクラスの学生が⑥の観点から選定した。交通・産業は公共政策・公共施設と密接に関わっていることから同じ題材が選ばれたようである。題材の選び直しをさせることもできたが、今回は学生の選定意図を尊重し、観点の違いが明確に分かるよう指導し、作業を続行させた。

題材所在地について多い順にあげると、小山市18題材、宇都宮市12題材、栃木市4題材、下野市4題材、日光市4題材、佐野市3題材、真岡市3題材、那須塩原市3題材、那須町3題材、鹿沼市2題材、益子町1題材、足利市1題材、大田原市1題材、矢板市1題材であった。小山市、宇都宮市、栃木市については前年度もこの順番で上位だった。前述したように、大学の所在地小山市で親しまれている題材、移動のための公共交通手段がありフィールドワークがしやすい題材が選定条件になるようである。今回県内25市町の中で1題材もあがらなかったのは、さくら市、那須烏山市、上三川町、茂木町、市貝町、芳賀町、壬生町、野木町、塩谷町、高根沢町、那珂川町の2市9町であった。この中には前年度に1つも選出されなかった、さくら市、那須烏山市、茂木町、市貝町、塩谷町、高根沢町も入っていた。この2市4町の題材は前年度選定されなかったので積極的に選定してほしい旨を事前に受講生に伝えていたが、結果として選定されなかった。これらの地域への関心の薄さや地域研究の浅さ、フィールドワークを困難に感じさせる公共交通機関の乏しさ等が原因として考えられるだろう。

フィールドワーク先については、図書館、自治体、観光協会、関係施設、関係者・関係団体等多岐にわたった。

フィールドワーク後は前年度同様、題材研究プレゼンテーション、題材研究レポートおよび読み札・絵札（サイズは昨年度同様）の作成提出、完成させた札を用いた競技体験で終了した。題材研究レポートは前年度の項目に加え、小学校社会科学習指導要領との具体的な関わりを新設した。これは各題材の教材的価値をより一層明確にさせる意図がある。実際の読み札・絵札は60組もあるので、紙幅の都合上省略する。

## (2) ゼミナールにおける制作

2016年度後期、筆者が担当するゼミナールにおいて、所属の3年生全7名とともに、完成版「栃木かるた」の残り23組の制作に取り組んだ。その際、すでに仕上がっている21組の題材と重複しないよう、2016年度前期「社会科概説Ⅱ」受講生が制作した全60組のかるたの中から10題材を精選させた。また、21組の札に読まれていない、さくら市・那須烏山市・塩谷町・高根沢町・茂木町・市貝町・芳賀町・壬生町・上三川町からそれぞれ1題材を選定させた。札の精選・補作の条件は、「小学校学習指導要領社会及び同解説の内容に関わる題材、日本各地や世界とのつながりが探究できる題材、持続可能な社会の担い手としての資質・能力が養えるようなもの」とした。そして、一人につき3～4題材を担当させて念入りな文献調査を行わせ、フィールドワーク計画を立てた。第4表はゼミ生とともに選定した23の題材とそのフィールドワーク先である。

第4表 2016年度後期ゼミナール選定  
完成版「栃木かるた」題材及びフィールドワーク先一覧

題材名	分類番号	題材所在地	フィールドワーク先
戦場ヶ原	①	日光市	なし
尚仁沢湧水	①	塩谷町	なし
那須与一	②	大田原市	道の駅那須与一の郷与一伝承館
田中正造	②	佐野市	なし
馬頭広重美術館	②	那珂川町	馬頭広重美術館
殺生石	③	那須町	殺生石
日光杉並木	③	日光市	日光市歴史民俗資料館
梨	④	芳賀町	なし
自動車工場	④	上三川町	日産自動車栃木工場
宮内庁御料牧場	④	高根沢町	宮内庁御料牧場（車窓見学）
真岡鐵道	④	真岡市	真岡駅SLキューロク館
液晶テレビ	④	矢板市	なし
鳥山和紙	⑤	那須烏山市	鳥山和紙の里
山あげ祭り	⑤	那須烏山市	山あげ会館
鹿沼秋祭り・彫刻屋台	⑤	鹿沼市	鹿沼市文化活動交流館
小山花火大会	⑤	小山市	なし

喜連川温泉	⑥	さくら市	道の駅きつれがわ
美土里館	⑥	茂木町	有機物リサイクル施設美土里館
芝ざくら公園	⑥	市貝町	なし
おもちゃのまち博物館	⑥	壬生町	壬生町おもちゃ博物館
野木町ひまわり フェスティバル	⑥	野木町	なし
かんびょう	⑦	下野市	壬生町歴史民俗資料館とちぎわんぱく公園 レストラン花みどり
栃木のもやし	⑦	栃木市	なし

23の題材のうち、2015年度と2016年度の「社会科概説Ⅱ」で取り上げられなかった2市4町については、ゼミ生とともにあらためて文献調査し、さくら市は喜連川温泉、那須烏山市は烏山和紙と山あげ祭り、茂木町は有機物リサイクル施設美土里館、市貝町は芝ざくら公園、塩谷町は尚仁沢湧水、高根沢町は宮内庁御料牧場を取り上げることにした。

フィールドワークについて、時期やルート、訪問先の事情でどうしても実施できなかったのは、戦場ヶ原、尚仁沢湧水、田中正造、梨、液晶テレビ、小山花火大会、芝ざくら公園、野木町ひまわりフェスティバル、栃木のもやし、であった。これらについては大変残念であったが、前期「社会科概説Ⅱ」で制作された該当札の題材研究レポートやゼミ生たちが行った文献調査結果等を活用することにした。フィールドワークはゼミ生全員の教育実習が後期前半に集中していたため、後期後半の12月内に全3日間行った(第5表)。

第5表 2016年度後期ゼミナールフィールドワーク実施表

<p>12月3日(土) 県中央・東部方面 ゼミ生7名と教員1名で実施                  8:30 小山駅東口集合→車移動(日産上三川工場・高根沢町宮内庁御料牧場車窓見学)→さくら市道の駅きつれがわ(足湯体験)→車移動→那珂川町馬頭広重美術館→那須烏山市和紙の里(はがき漉き体験)→那須烏山市山あげ会館→車移動→茂木町美土里館→真岡市SLキューロク館・情報センター→車移動→小山駅、19時頃解散</p>
<p>12月4日(日) 県北部方面 ゼミ生7名と教員1名で実施                  7:45 小山駅改札集合→電車移動→宇都宮駅乗り換え西那須野駅下車→バス移動→八幡神社前下車、大田原市道の駅那須与一の郷与一伝承館→バス移動→西那須野駅→電車移動→黒磯駅下車→バス移動→那須温泉下車、温泉神社・殺生石→バス移動→黒磯駅→電車移動→宇都宮駅乗り換え小山駅下車→小山駅、18時半頃解散</p>
<p>12月10日(土) 中・北部方面 ゼミ4名と教員1名で実施                  8:30 小山駅西口集合→車移動→壬生町歴史民俗資料館(かんぴょう関係資料見学)→車移動→壬生町おもちゃ博物館・レストラン花みどり(かんぴょう定食)→車移動→鹿沼市文化活動交流館(彫刻屋台見学)→徒歩で鹿沼駅→電車移動→今市駅下車、日光市歴史民俗資料館(日光杉並木資料見学)→徒歩で日光杉並木七本桜交差点そば一里塚跡→徒歩で今市駅→電車移動→宇都宮駅乗り換え、小山駅下車、18時頃解散</p>

このうち、12月3日に予定していた那須烏山市山あげ会館のみ、時間的な都合で訪問することができなかった。全3日間のフィールドワークは前年度同様盛りだくさんで体力を使うものだったが、7人のゼミ生は励まし合いながら大変意欲的に行動した。烏山和紙のはがき漉きや喜連川温泉などでの足湯、かんぴょう尽くしの定食など、五感を使った大変有意義な体験ができ、厳選した題材の教材的価値を再発見、再確認したフィールドワークであった(第2図)。



第2図 2016年度後期ゼミナールフィールドワーク写真一部

(左から道の駅きつれがわ足湯、烏山和紙づくり体験、日光杉並木ウォーク)

フィールドワーク後、その成果を生かしながら前期「社会科概説Ⅱ」で制作された該当の読み句と絵札原画を補作したり、新規に選んだ札の読み

句と絵札原面を作成したり、読み札の裏に記載する100字解説文を作ったりした。その際、液晶テレビと自動車工場については2題材を合わせて「国道4号線周辺に広がり栃木の経済を支えている産業」を表す札にした。その結果、1題材分空きができたため、新たに栃木県民について詠んだシンボル札を作った。そして、前年度制作した21組の読み句と絵札原面の補作もしながら最終的に44組の完成版「栃木かるた」を仕上げた。第6表はその読み句と解説文一覧、第3図は絵札一覧である。

第6表 完成版「栃木かるた」の読み句・解説文一覧

	題材 読み句	解説文
あ	<p><u>須賀神社</u> あかみこし いえやすこう 朱神輿 家康公の せんしきまつ 戦勝記る</p>	<p>藤原秀郷が940年に創建。1600年、徳川家康は当社境内で小山評定を開き、関ヶ原の戦いに勝利した。家康崇拝の縁あって、江戸幕府は日光東照宮の宮大工に本殿を縮小した豪華な朱神輿を造らせ、1658年に奉納した。1989年、当時に近い材料を使った朱神輿の大修復が完了。小山市宮本町。【朱御輿は県指定有形文化財】</p>
い	<p><u>二宮尊徳</u> いま まだ じんや のこ 今もまだ 陣屋に遺る ほうとくしほう 報徳仕法</p>	<p>小田原藩主の命を受け、1823年に一家で桜町に移住した。家族の支えを受けながら、陣屋を拠点に報徳の教えを実践し、8年かけて荒廃村を復興した。陣屋の襖には村人の教育に使われたとされる墨書が今も遺る。その後茂木、烏山、日光でも仕法を行い、今市で没した。真岡市物井。【桜町陣屋跡は国指定史跡】</p>
う	<p><u>山あげ祭り</u> うで み げ じんりき 腕の見せ場 人力であげる はりか山</p>	<p>450年の歴史を誇る日本一の移動式野外劇で、毎年7月末に開催される。烏山和紙を使った「はりか山」を人力であげる事から「山あげ」と呼ばれる。一条乱れぬ団体行動、豪華絢爛な野外歌舞伎、踊り子の美しい舞で人々を魅了する。那須烏山市。【国指定重要無形民俗文化財、ユネスコ無形文化遺産】</p>
え	<p><u>ひまわりフェスティバル</u> えがおさ の ぎまち 笑顔咲く 野木町ひまわり フェスティバル</p>	<p>野木町の町花であるひまわりを使った町おこしイベントとして、1992年より毎年7月下旬に開催。期間中は4.5haの敷地に約20万本のひまわりが咲き誇る。水と緑と歴史の町づくりやワイズユース（賢明な利用）の理念に基づき、小中学生や町民の環境学習の場としても活用されている。下都賀郡野木町。</p>
お	<p><u>栃木のもやし</u> おいしさの ひみつ ちかすい 秘密は地下水 とちぎ 栃木のもやし</p>	<p>栃木県北部、那須連山や日光連山から流れるミネラルバランスの優れた地下水を利用して栽培されている。もやしの品質は原料と水で7～8割が決まることから、県内にはもやしを生産する企業各社が工場を建設し、世界トップレベルの技術を用いた大量生産を行っている。栃木市、真岡市ほか。2016年栃木県もやし生産量全国1位。</p>

白鷗大生と取り組んだ「栃木かるた」づくりの実践報告

か	<p><u>結城紬</u>                  絹くくり 亀甲柄に                  魂込め</p>	<p>県南部鬼怒川沿いの養蚕地域を産地とし、2千年の歴史を持つ日本最古の絹織物。糸つむぎ、絹くくり、地機織りの高度な技法を今も守り伝える。代表的な絹模様は亀甲柄。紬の着物は“三代着て味が出る”と言われるほど丈夫で長持ちする。  <b>【国重要無形文化財、伝統的工芸品、ユネスコ無形文化遺産】</b></p>
き	<p><u>宇都宮餃子</u>                  餃子の味は 地産地消の                  たねが生む</p>	<p>戦後中国からの帰還者が普及させたといわれる宇都宮餃子には、県産のキャベツやニラ、白菜が使われている。1990年に宇都宮市が「餃子購入日本一」を町おこしに活かしてから全国的知名度を得た。毎年秋に市内店舗が出席する餃子祭りが開催されている。2016年現在市内の餃子専門店・料理店数は約200軒。</p>
く	<p><u>下野国分寺跡</u>                  国史跡 天平伝える                  国分寺</p>	<p>奈良時代に聖武天皇の詔によって全国60数か所に建立された官寺の一つ。広さは東西413m、南北457mで、金堂・講堂・七重塔などの東大寺式伽藍が配置されていた。基盤には県内産出の凝灰岩が使われた。現在は遺構が整備され、復元想像図や説明版等が設置されている。下野市国分寺。【国指定史跡】</p>
け	<p><u>とちおとめ(栃木のいちご)</u>                  ケーキを彩る 深紅の舞姫                  とちおとめ</p>	<p>冬の豊富な日照量、夏冬・昼夜の寒暖差、きれいな水等の条件がそろった本県はいちごの収穫量、作付面積、産出額とも日本一。なかでも「とちおとめ」は圧倒的人気を誇る。県内では先進的な栽培研究や様々な商品開発が行われている。2015年産栃木県内いちご収穫量24,800㏍（農林統計）。</p>
こ	<p><u>戦場ヶ原</u>                  広大な 湿原探勝                  戦場ヶ原</p>	<p>男体山の噴火で川がせき止められ、湖ができた後、土砂等の流入により形成された高層湿原。地名は昔、山の神々がここで戦い合った伝説に由来する。野生動物や植物の宝庫で、散策用木道や低公害バスの導入等により貴重な自然を守っている。日光国立公園内。標高1400m、広さ400ha。【ラムサール条約登録湿地、とちぎの景勝百選】</p>
さ	<p><u>芝ざくら公園</u>                  サシバ舞う 市員町の                  芝ざくら</p>	<p>町おこしの一環として、2006年に貯水池造成の残土を利用して開園。総面積2.4haに約25万株の芝桜が植えられ、季節を通して様々なイベントが行われている。植栽や管理はボランティアが担当している。春から夏にかけて絶滅危惧Ⅱ類指定のサシバが繁殖のために飛来する。芳賀郡市員町。</p>
し	<p><u>オオルリ</u>                  初夏迎え 渓流に響く                  オオルリの唄</p>	<p>5月から10月に日光、塩原、那須などの渓谷で見られる渡り鳥で、ウグイスやコマドリとともに日本三大鳴鳥といわれる。1964年、鳥獣愛護理解を目指して県鳥に指定。1986年6月15日の県民の日に県のマスコットとして誕生したルリちゃん、その後県警のマスコットにも採用されるなど大活躍している。</p>
す	<p><u>日光杉並木</u>                  杉並木 目指すは日光                  東照宮</p>	<p>日光東照宮の造営を機に、徳川家康の近臣、松平正綱によって寛永2（1625）年頃から20年以上かけて作られた杉並木街道。日光街道・例幣使街道・会津西街道に約20万本の杉が植えられた。現在残る約1万3千本を守るため様々な保護活動が行われている。日光市。【国特別史跡、国特別天然記念物、とちぎの景勝百選】</p>

せ	<p>大谷観音 せんぼん 千本の 手で見守る おおお かんのん 大谷観音</p>	<p>天台宗大谷寺には平安初期から鎌倉にかけて凝灰岩の壁に彫られた磨崖仏がある。観音堂には空海作と伝えられる像高約4.9mの本尊、石造千手観音菩薩立像がある。千の手ひとつひとつに目が彫られており、いつも人々を見守っている。宇都宮市大谷町。【堂内の磨崖仏は国指定史跡・重要文化財】</p>
そ	<p>田中正造 そがん しょうざう 訴願して 闘う正造 ほこ 栃木の誇り</p>	<p>安蘇郡小中村（現佐野市）の名主の長男として出生。第1回衆議院議員選挙当選後、日本の公害問題の原点といわれる足尾銅山鉱毒事件に被害民と共に立ち向かう。議員辞職後、事件解決のために明治天皇へ直訴を試み、広く世間に事件を知らせた。谷中村復興を図る途上で病没した。</p>
た	<p>渡良瀬遊水地 だいらせうすい 大湿原 いのちを守る ゆうすい 遊水地</p>	<p>栃木、群馬、埼玉、茨城にまたがる面積33km<sup>2</sup>、総貯水量2億m<sup>3</sup>の日本最大の遊水地。渡良瀬川の洪水や足尾鉱毒被害対策を目的に1930年に完成した。洪水調節や都市用水の補給以外に、多様な動植物の生息地として重要である。栃木市・小山市・野木町。【ラムサール条約登録湿地、とちぎの景勝百選】</p>
ち	<p>彫刻屋台 ちやくく やたい 彫刻の 屋台競演 ぶつつけ祭り</p>	<p>毎年10月中旬に行われる鹿沼秋祭りには、日光東照宮の彫師が製作に関わった豪華絢爛な彫刻屋台27台が町内を一日中練り歩く。屋台のお囃子の調子を競い合う「ぶつつけ」が見物。祭りの起源は江戸初期で、鹿沼宿の今宮神社へ奉納する雨乞いの祭礼に由来する。鹿沼市。【屋台行事は国重要無形民俗文化財、ユネスコ無形文化遺産】</p>
つ	<p>かんぴょう つちき らいう めぐみ 土冷ます 雷雨の恵み ゆうげん 夕顔の実</p>	<p>ウリ科の植物ユウガオの果肉を細長くむいて乾燥させた食べ物。原産地はアフリカ・アジアの熱帯地方で、日本には江戸時代に伝来した。1712年に近江から国替えした壬生城主鳥居忠英が商品作物として栽培を奨励し、やがて本県を代表する特産物となった。下野市ほか。2014年次栃木県かんぴょう収穫量・出荷量とも全国1位（98%）。</p>
て	<p>真岡木綿 まのう まわた 伝統を 今につなげる まのう さら 真岡の晒し</p>	<p>江戸中後期、県南東部鬼怒川流域では農家の副業として木綿生産が栄え、「真岡」が木綿の代名詞になるほど隆盛した。1981年に真岡商工会議所が中心となって復興が図られ、綿花栽培から糸紡ぎ、染め、織りまで全てを手作業で行う技術を甦らせた。栃木県真岡市。</p>
と	<p>松尾芭蕉 まつぎみ せきききぎむ 栃木道 足跡刻む ばしょう くだ 芭蕉の句碑</p>	<p>江戸前期の俳人で紀行文の傑作「奥の細道」を著す。門人曾良を伴い、下野では間々田、鹿沼、日光、玉生、黒羽、那須等22泊23日滞在し、各所で句を詠んだ。日光東照宮旧宝物館敷地内には、芭蕉が参詣した際詠んだ句碑がある。日光市内。</p>
な	<p>しもつかれ しなないる あじ びょうま ばら 七色の味 病魔を払う しもつかれ</p>	<p>栃木を中心とした北関東の郷土料理。旧暦2月最初の午の日に稲荷様へ供える行事食で「七軒の家のしもつかれを食べると病気になる」といわれる。現在は給食への取り入れや様々なアレンジ商品の開発、催し物の開催など、しもつかれを後世に伝える試みがみられる。</p>
に	<p>日光湯波 にっこう さいようほうよ 日光の 栄養豊富な 湯波商品</p>	<p>大豆を原料とし、消化・吸収抜群、栄養豊富な日光の名物。日光開山の折に山岳修験者達が持ち込み、携帯食・保存食として親しまれた。後に皇室や日光社寺に献上される重要な食品となり今に伝えられる。現在は揚げ湯波饅頭などのアレンジ商品も広がっている。日光市。</p>

白鷗大生と取り組んだ「栃木かるた」づくりの実践報告

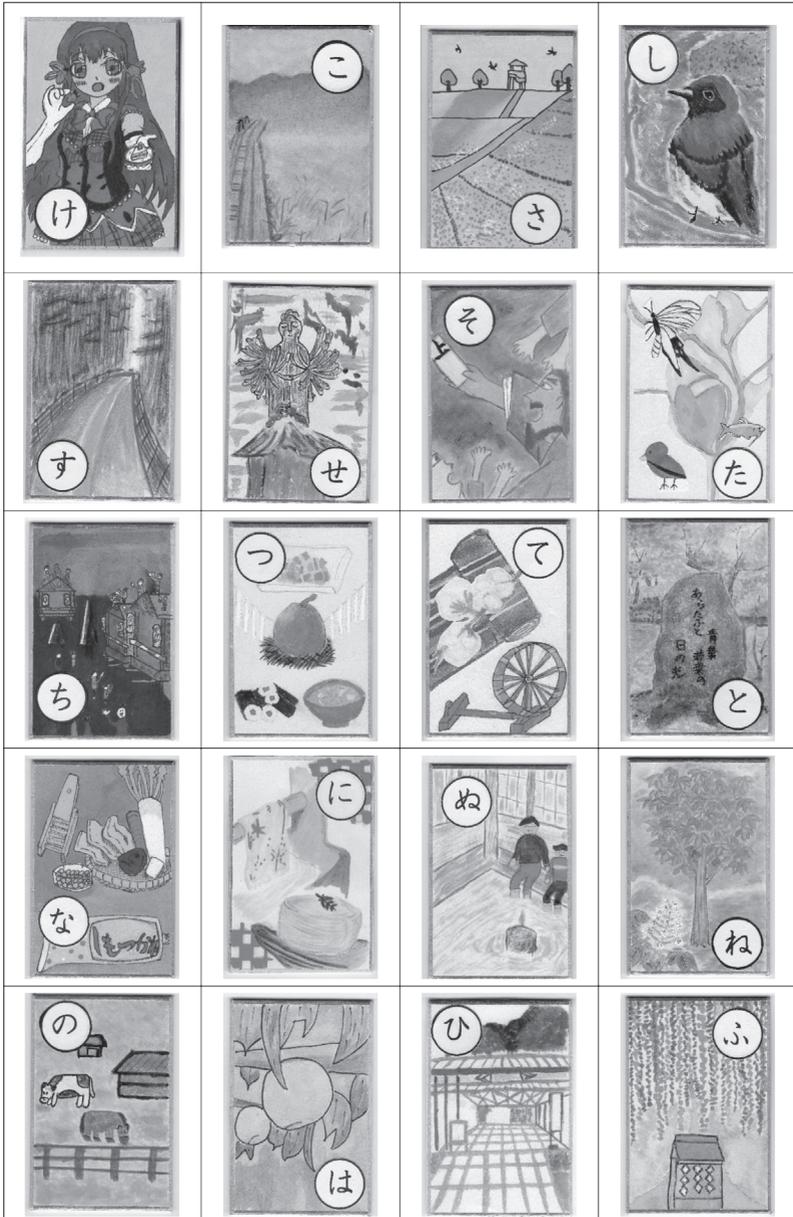
ぬ	<p>喜連川温泉 ぬく 湯に癒される 喜連川</p>	<p>1983年に当時の町長が町おこしのために掘削した温泉。喜連川城跡を中心に町営ほか民間の温泉施設が点在する。優良な弱アルカリ泉で、中央温泉研究所から「日本三大美人の湯」に選ばれている。道の駅きつねがわにある足湯は地域住民や旅人の憩いの場である。さくら市。</p>
ね	<p>栃木県民 ね 根を張って 伸びゆく県民 200万</p>	<p>1873年の本県誕生時の県民人口は約43万人、その後那須野が原の開墾や農業技術の進歩などにより急増した。戦後は県南地域への工場進出による人口流入が進み、1997年に200万人を突破した。県木トチノキは夏に涼しい木陰を作る。2015年次県民人口1,974千人（全国18位）。</p>
の	<p>御料牧場 のんびりと 草食い牛・馬 御料牧場</p>	<p>1969年に千葉県成田市から移転した宮内庁管轄の牧場。252haにおよぶ広大な土地で、皇室用の馬車をはじめ、乳製品や牛肉以外の羊・豚・鶏肉及び鶏卵など生産をしている。さらに在日外交団の接遇や、皇族方の静養の場としても使用されている。高根沢町、芳賀町。</p>
は	<p>栃木の梨 は 芳賀町で 梨狩り楽しむ 秋の一日</p>	<p>芳賀町をはじめ、宇都宮市、大田原市、那須烏山市、小山市等で特に生産が盛んである。7・8月は「幸水」、9月は「豊水」、9月下旬からは「あきづき」「新高」、10月中旬から11月下旬は「にっこり」と、生産者自慢のみずみずしく甘い梨が味わえる。芳賀郡芳賀町他。2014年次栃木の梨生産量は全国3位。</p>
ひ	<p>馬頭広重美術館 ひ 広重の 浮世に触れる 那珂川の里</p>	<p>江戸後期の浮世絵師・歌川広重の肉筆画や版画などを展示する町営施設。さくら市出身の実業家・故青木藤作氏のコレクション寄付を町が受け、地域活性化を目指して設置された。隈研吾氏設計の建物には地元産の八溝杉や烏山和紙、芦野石などが使用されている。那須郡那珂川町。</p>
ふ	<p>足利フラワーパークの藤 ふ 藤の花 世界で一番 美しい</p>	<p>1968年開園。面積9万4千㎡の敷地内には、樹齢150年に及ぶ量600枚分の藤棚や長さ80mもの白藤のトンネルなど350本以上の藤が咲き誇る。四季折々の花や夜景も楽しめ、来園者は年間100万人以上、更なる経済効果が期待される。足利市迫間町。【大藤4本と白藤のトンネルは県天然記念物】</p>
へ	<p>日光東照宮 へ 平和を願う 東照宮の 動物たち</p>	<p>江戸幕府初代将軍徳川家康を祀る日光東照宮は、自然の地形を生かした荘厳な宗教的空間で、社殿には平和の願いを託された動物たちの彫刻が数多く存在する。創建以来定期的に修理を行い、鮮やかな極彩色を維持している。日光市山内。【国宝・重要文化財多数、世界文化遺産登録】</p>
ほ	<p>生乳生産 ほ 本州一 自然が生み出す 栃木の生乳</p>	<p>明治初期、欧米の大規模農業や牧畜の振興にならって那須野ヶ原が開拓され、農場や牧場が設立された。以来、広大な自然がある県北部を中心に生乳生産が盛んになり、現在は北海道に続き全国2位の生産量を誇る。2015年次栃木県生乳生産量325,903t。</p>
ま	<p>殺生石 ま 魔性の狐 今も息づく 殺生石</p>	<p>美しい女性に化けた九尾の狐が人々に災いをもたらす毒石となった伝説に基づく溶岩の大塊。周辺には硫化水素や亜硫酸ガスが噴出している。松尾芭蕉も訪れ、「石の香や 夏草赤く 露あつし」と詠んだ。毎年5月に殺生石御神火祭が開催される。那須郡那須町。【県指定文化財、国指定名勝、とちぎの景勝百選】</p>

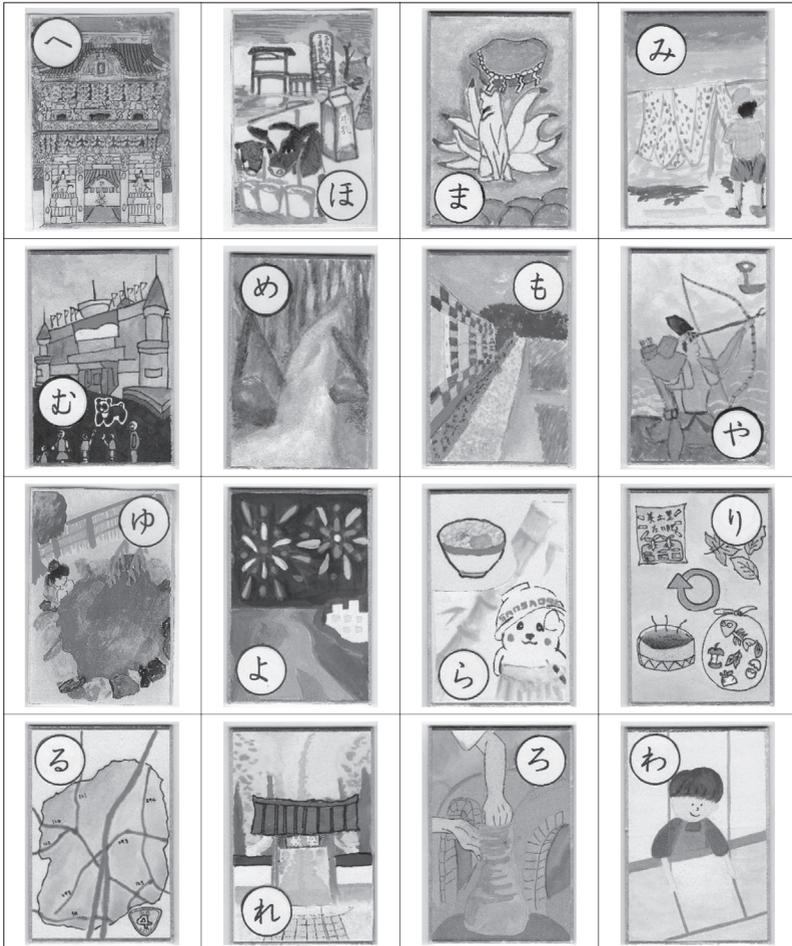
み	<p>宮染め みやぞ 宮染めの 後世につなぐ うつく 美しさ</p>	<p>江戸末期に宇都宮市内の田川沿いで栄えた「浸し染め」を源流とする宮染めは、明治以降「機械織りの国産木綿」と「欧米の化学染料」を合わせた「注染」という日本独自の新技术で飛躍を遂げ、現代まで継承されている。宇都宮市。2016年現在宇都宮市内染色業工場数3軒。</p>
む	<p>おもちゃ博物館 おもちゃ 胸躍る みぶまち 壬生町おもちゃ博物館</p>	<p>1960年代に町が工業団地を造成したおり、玩具工場団地が誘致され、国内外向け玩具製造の一大拠点となった。1990年代になり東南アジアや中国に生産拠点が移動すると、建物の有効活用と地域活性化を目指して玩具の展示をするようになった。下都賀郡壬生町。おもちゃ博物館の展示総数約3万5千点。</p>
め	<p>尚仁沢湧水 めいずい はやく 名水を育む しゅうじんざわ も 尚仁沢の原生林</p>	<p>高原山麓の釈迦ヶ岳付近の谷間から湧出している。付近は樹齢数百年におよぶナクヌギ等の原生林に覆われ、それらが保水力となって水を育む。山岳修験者たちが山岳登拝の際、この湧水で身を清めたと伝えられる。塩谷郡塩谷町。一日あたり湧水量65,000トン。【環境庁認定名水百選。とちぎのふるさと田園風景百選認定】</p>
も	<p>真岡鐵道 まおかてつどう 真岡鐵道 車窓に流れる しきいろ 四季の色</p>	<p>1912年に栃木と茨城を結ぶ真岡線として開業。1988年に第3セクター方式で真岡鐵道として再出発した。下館と茂木をつなぐ交通として地域住民に利用されているほか、駅そばにSL資料館を設けたり週末にSLを走らせたりして観光振興を図っている。真岡市。</p>
や	<p>那須与一 なすのよいち 矢の先の 扇射落とす なすのよいち 那須与一</p>	<p>下野国那須出身武将で弓の名手。文治元（1185）年、屋島合戦の折、揺れ動く平家の軍舟の上に掲げられた扇の的を、義経の命により源氏の武将を代表して見事射落す。その活躍は平家物語と琵琶法師によって伝えられた。京都伏見の即成院にて20余年で早世した。大田原市。</p>
ゆ	<p>鬼怒川温泉 おんががわ 豊かな自然 再生してゆく おんががわ 鬼怒川温泉</p>	<p>かつては会津西街道の宿場町で、日光参詣の大名や東照宮僧侶の湯治場だった。近年宿泊客・観光客が減少傾向にあるが、首都圏から来やすく、自然豊かで風光明媚な地の利を生かして、かつての温泉地の賑わいを再生する様々な工夫に取り組んでいる。日光市。2016年現在日光観光協会加盟宿数は212。</p>
よ	<p>小山花火大会 おこやま 夜の野に 輝き響く おこやま 小山の花火</p>	<p>小山花火大会は1950年から60年以上にわたり小山市中心市街地西部を流れる思川を舞台に毎夏開催されている。1991年からはサマーフェスティバルに改称した。交通の便も良く、メディアにも取り上げられることから県外からの観光客も多い。小山市。総打ち上げ数は2万発。</p>
ら	<p>佐野ラーメン さの ラーメンは 青竹麵打ち さの 佐野の味</p>	<p>佐野ラーメンの歴史は大正期に中国人コックが「青竹打ち」を伝授したことに始まるとされる。織物の町で栄えた頃、織維業者や工女達から人気を得た。佐野名産の小麦、出流原弁天池の湧水を使った醤油味の平麺が特徴。2016年佐野ラーメン会登録数77店舗。</p>
り	<p>美土里館 みど里 リサイクル みど里たい肥で 大地再生</p>	<p>2007年に開業した町営の有機物リサイクルセンター「美土里館」では、家畜の糞尿と家庭の生ごみを原料とし、町内の間伐材や落ち葉などを調整材として発酵させた美土里たい肥を作っている。人と自然に優しく、環境保全を重視した循環型農業に町外からの視察が絶えない。芳賀郡茂木町。</p>

白鷗大生と取り組んだ「栃木かるた」づくりの実践報告

る	<p><u>国道4号線と地域発展</u>                  ルート4 <small>とちぎ づからぬ</small>                  栃木を貫く                  大動脈</p>	<p>日光街道と奥州街道を継承する国道4号は、東京都中央区を起点に栃木県のほぼ中央を縦走し、青森県青森市を終点とする。県内の沿線には自動車工場や家電工場等が立ち並び、地域の暮らしや産業を支え、社会経済の発展に重要な役割を果たしている。</p>
れ	<p><u>足利学校</u>                  歴史ある <small>にほんさいこ</small>                  日本最古の                  学問所</p>	<p>日本最古の大学で、フランシスコ・ザビエルから「坂東の学院（アカデミー）」と世界に紹介された。在学期間は自由で、自学自習の精神を尊んだ。学費は無料で食事と宿舎も提供された。教育の原点・生涯学習の拠点として現代も市民向けの論語素読教室、儒学講座などが開かれている。足利市昌平町。【国指定史跡、日本遺産認定】</p>
ろ	<p><u>益子焼</u>                  ろくろを回し <small>まわす</small>                  技術を培う <small>つちか</small>                  益子焼</p>	<p>益子焼は江戸末期、笠間で修行した大塚啓三郎が窯を築いたことに始まるとされる。以来、優れた陶土の産地であり大市場に近いこと、陶芸家濱田庄司が民芸運動を進めたこと等により発展した。春秋には陶器市で賑わう。芳賀郡益子町。現在の窯元数は約260、陶器店数は約50。</p>
わ	<p><u>鳥山和紙</u>                  和紙を生む <small>わざ</small>                  技と冷水 <small>れいすい</small>                  鳥山</p>	<p>鳥山地域の技術と文化を代表する伝統工芸品で奈良時代に起源をもつ。日本で最も優良とされる那須楮、那珂川の冷水、職人の技術などが融合して、強く優雅な和紙が漉かれる。歌会始の懐紙、山あげ祭の舞台、県内外の卒業証書などに使われている。那須烏山市。【国指定重要無形文化財】</p>







第3図 完成版「栃木かるた」の絵札一覧

札を入れる箱は市販のハガキ入れ（100枚入り）を用い、そのサイズに合った蓋絵（第4図）、蓋裏の奥付（第5図）、県木“とちの木”の写真を使った札仕切りを作成した。また、読み句と解説文一覧と題材所在地マップを記載したA4サイズの添付資料も作成した（第6図）。



第4図 完成版「栃木かるた」の蓋絵

とちぎ  
「栃木かるた」について

この「<sup>とちぎ</sup>栃木かるた」は、<sup>はくおうだいがくじょうがくぶ</sup>白鷗大学教育学部の学生が  
<sup>ちいき</sup>地域の<sup>かたがた</sup>方々の<sup>ちから</sup>力を<sup>か</sup>借りながら<sup>つく</sup>作りました。

<sup>くみ</sup>44組の<sup>よ</sup>読み札と<sup>ふだ</sup>絵札には、<sup>えふだ</sup>私たちが<sup>わたし</sup>住んでいる  
<sup>とちぎけん</sup>栃木県を<sup>たいひょう</sup>代表する<sup>ゆた</sup>ような<sup>しぜん</sup>豊かな<sup>れきし</sup>自然、<sup>さんぎょう</sup>歴史、<sup>ぶんか</sup>産業、  
文化などがたくさんつまっています。

このかるた遊びを通して、ふるさと<sup>とちぎ</sup>栃木の<sup>し</sup>ことを<sup>し</sup>もっと<sup>し</sup>知り<sup>し</sup>たくな<sup>し</sup>って<sup>し</sup>くれたら<sup>し</sup>うれしいです。

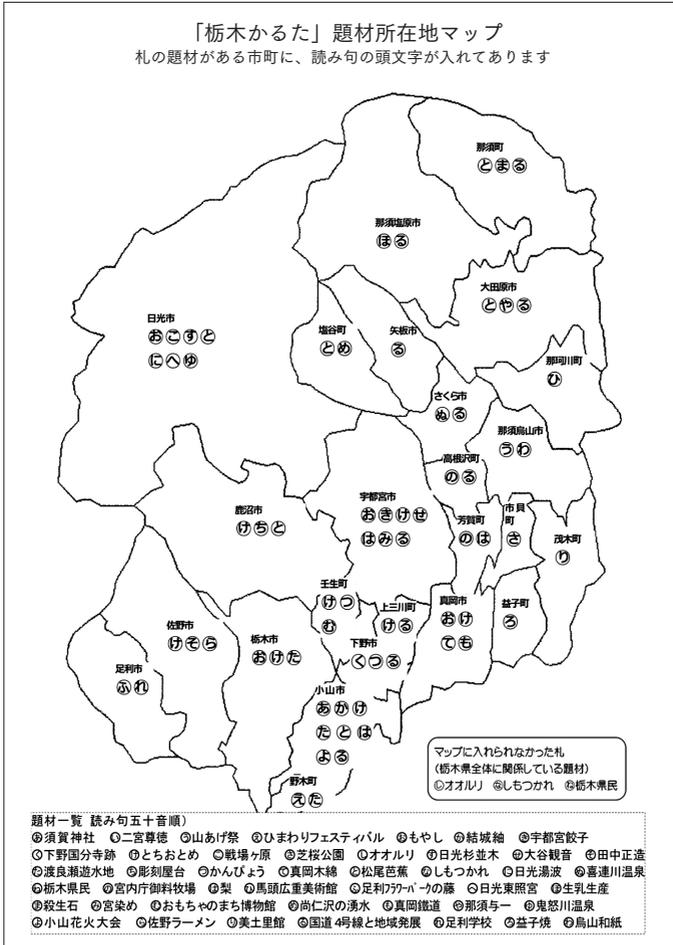
どうか<sup>か</sup>勝ち<sup>ま</sup>負けに<sup>まも</sup>こだわらず、<sup>たの</sup>ルールを守って<sup>あそ</sup>楽しく<sup>あそ</sup>遊んで<sup>あそ</sup>ください。

2017年2月7日  
制作・発行代表  
白鷗大学教育学部兼任教員 原口美貴子

制 作：2015年度・2016年度「社会科概説II」受講生および  
原口ゼミ受講生  
飯塚仁美、泉田和也、伊藤かなえ、岩本侑也、  
賀川逢加、熊谷拓也、鈴木祐太(2015年度)  
岩崎寿紀、笠原広哉、川野政之、神部優花、  
木村巧、武藤真帆子、松本諒太(2016年度)

指導助言：NPO法人日本郷土かるた協会  
※本かるたに関わる画像や文章、内容等の無断転載・転用は  
ご遠慮下さい。

第5図 完成版「栃木かるた」蓋裏の奥付



第6図 完成版「栃木かるた」添付資料  
 (この裏面には第6表と同様の読み句・解説文一覧を記載した)

### III. 「栃木かるた」づくりの感想

第7表は、「栃木かるた」の札づくりに取り組んだ2015年度・2016年度受講生および完成版「栃木かるた」を制作したゼミナール学生の感想である。紙幅の都合上各1名しか紹介できないが、それぞれ一部抜粋して掲載する。

## 第7表 「栃木かるた」づくりの感想

## ○2015年度「社会科概説Ⅱ」受講生H.Aさん

フィールドワークや体験を通して、自分たちは自分たちが思うよりも「地域を知らない」ということを実感した。自分たちの地域を学習することで、「こんなにすばらしい地域なんだ。こういう特色があって、私たちはそれに支えられている（いく）のだ」という気づきや発見につながり、非常に意義があると思った。また、「自分たちもこの地域の良さを後に残していこう」「もっと大切にしていこう」という思いが芽生えるということもよく分かった。郷土かるたの作りによって、自分たちの地域・ふるさとに対しての愛情が高まり、その一員としての認識がより深く根付いて、児童の心の成長や心の豊かさにつながることを実感した。（中略）かるた大会は小学校6年生ぶりでもとても懐かしい感じを受けた。たくさんの方のたくさんの方の思いと、その札からわかる栃木県の魅力を思う存分味わうことができた。このような活動を自分も小学校か中学校の授業で取り入れ、地域と繋がりのある学校教育を目指したい。

## ○2016年度「社会科概説Ⅱ」受講生I.Sさん

社会科概説Ⅱではとても多くのことを学ぶことができた。かるたから学ぶことはとてもあるのだと感じた。郷土とは何か、地域とは何かを学ぶことから始まり、フィールドワークの意義や身近な地域に関する知識の取得など、新たな発見があつてとても楽しい講義となった。危険予知トレーニングの講義は、将来教員になったときに役に立つだけでなく、一人の人間として生きていくうえで大切なことだと思うので、社会科教育だけでなく人間育成にもつながっていると考えた。また、フィールドワークに実際に行ったことによって、現地でしか分からないこと、話を聞かないと分からないことなど、たくさんのことを知ることができた。どんなに本やインターネットで調べても、一回見ることにかなわないと身をもって感じた。そして、現地の人に話を聞くことによって、さらに理解が深まると思った。将来教員になって児童に指導していく際には、見ることも、聞くことも大切さを伝えたい。また、今回題材で私自身が学んだことも児童に伝えたい。行って知ったことを伝える大切さも今回の15回の講義で学んだことの1つである。

## ○2015年度ゼミナール受講生Y.Iさん

「栃木かるた」作りを経て、初等社会科教育の観点から郷土かるたのメリット・デメリットが見えてきた。まず、メリットは、郷土かるた作りは郷土の歴史や文化などについて実際に調べたりまとめたり、フィールドワークを行ったりすることで、児童生徒に実感の伴った理解を促すことができるという点である。また、郷土かるたを教材として活用する場合、活動を中心とした授業展開ができるため、児童生徒の学習意欲を喚起することができる。さらに、郷土の言い伝えや歴史、様々な文化やゆかりのある偉人、歴史的建造物など、児童生徒の生活に身近なものからあまり知られていないものまで様々な題材があるので、調べ学習の選択肢を多く提示することができる。次にデメリットであるが、まず、単なるかるた遊びに終始することがないように留意する必要がある。また、かるたの題材をもとに調べ学習する際は、単元のまとめで振り返りの時間を設けることが必要である。ただ調べるだけでなく、調べてわかったことを個人やグループで発表し合ったり、全体で共有したりして、郷土への知識や理解、愛情を深めることが求められる。今回のかるた作りを通して、フィールドワークの重要性や郷土かるたの教材的意義、郷土学習の在り方について深く考えることができた。現在、地方と都市部をめぐっては、格差是正や地方創生、町おこしなど様々な取り組みが行われている。社会科、とりわけ郷土学習については、教員自身が郷土に関心を持ち、調査し、知識を深める必要がある。児童生徒が郷土の良さを知り、郷土愛や誇りを培いながらより豊かな生活を送れるよう、教員も常に努力しなければならないと改めて感じた。

○2016年度ゼミナール受講生K.Tさん

「栃木かるた」は、栃木県内すべての市町から最低1つは題材を選定したので、県内すべての学校において身近な地域に関する学習で使えると思う。また、小学校第3、4学年の内容(1)から(6)において活用できると思う。例えば内容(6)で栃木県に関する学習を行う際、導入部において「栃木かるた」遊びを行い、栃木県に関する親しみや愛着、新たな発見や既存知識の再確認をしてから、いくつかの札を取り上げて題材について質問し、学習への興味関心を引き出す。展開部で栃木県の地理、歴史、産業、文化等を学習した後、終末部で改めて「栃木かるた」で遊び、解説文の説明を加えながら学習内容を確認する。また、社会科だけでなく他教科等でも活用できる。「栃木かるた」作りの題材調べはパソコンを使って総合的な学習の時間で、読み札や絵札の表現活動は図工科と連携できる。また、生活科では昔遊びの単元で地域の方々と一緒にかるた遊びができる。国語科では俳句や詩の単元で「栃木かるた」の読み句を参考に五七五のリズムについて学習することができる。家庭科では、「栃木かるた」の札に取り上げられている食材や料理、特産物を使った調理実習をすることができる。特別活動や総合的な学習の時間では、高学年児童が「栃木かるた」全校大会を企画、開催、実行したらどうか。雨や雪など天候が悪い日の休み時間等での活用も考えられる。このように考えると、郷土かるたは社会科だけでなく、様々な教科で活用可能な優れた教材であると確認できる。フィールドワーク、読み句考案、絵札制作、所在地マップ制作、印刷した札の切り取り作業…すべてが大変でかるた作りの苦勞を体感できたが、今となってはすべて良い思い出である。将来教員になった暁には、可能な限り「栃木かるた」、郷土かるたを活用して、その良さや魅力を存分に生かしながら学級運営や授業を行いたい。

#### IV. かるたの活用

2015年度制作した21組については5セット印刷し、2016年2月に開催した筆者のゼミナール卒論発表会アトラクションとして、所属の3、4年生とともに競技体験した。また、2016年度に完成させた44組については20セット印刷し、2017年2月の同発表会后アトラクションにて、同2、3、4年生とともに競技体験した。完成版「栃木かるた」は下野新聞小山支局記者より取材申し込みを受け、2017年3月18日に白鷗大学構内で制作経緯の説明、ゼミ生3名と記者との競技体験及び感想インタビューが行われた。この時の取材内容はかるたの札を持ったゼミ生と筆者の写真とともに、2017年3月28日付の下野新聞に掲載された。

完成版「栃木かるた」は、制作に関わった2か年のゼミ生全14名に1セットずつ渡し、学校教育や社会活動での活用を託した。その後、2017年春に卒業し、栃木県小学校教諭に新規採用された元ゼミ生から、「赴任先の小学校で『栃木かるた』を使った授業をすることになった」との連絡が入った。赴任先の校長が下野新聞記事を読んで関心を持ち、早速実践を勧めてくれたとの話である。元ゼミ生はパウチ化した札を4セット作成

し、担当クラスの社会科の授業や仲良しタイム（ロング昼休みに行う縦割り班活動）で活用しているようである。

その他の活用としては、筆者が担当する白鷗大学教育学部講義「社会科概説Ⅰ」「社会科概説Ⅱ」「社会科教育法」で身近な地域学習における社会科教材の1つとして紹介したり、実際に体験させたりしている。

学外の活用としては、今後栃木県内小学校とのつながりを作り、ゼミ生とともに「栃木かるた遊びビジット」を企画・実施したいと考えている。

## V. おわりに

小稿では、本学の講義「社会科概説Ⅱ」で制作した「栃木かるた」の札と、それをもとにしてゼミナールの学生とともに制作した完成版「栃木かるた」について、その制作過程、完成させた読み札・絵札、学生の感想および活用事例等の実践報告を行った。掲載した学生の感想はごく一部であるが、栃木県に対する認識の深化や、郷土かるたが小学校社会科身近な地域（郷土）の学習教材として有効であることの気づき等、身近な地域（郷土）の学習指導に関わる重要な力が育成されたことが窺えるだろう。

今後は完成版「栃木かるた」の普及を目指すとともに、白鷗大学教育学部で4カ年かけて取り組んだ「小山かるた」「栃木かるた」づくりの受講生感想を分析・比較・考察して教職課程における郷土かるた作りの意義を明らかにすること、アクティブラーニングの手法を取り入れた郷土かるた制作モデルを提起することを課題としたい。

**【注及び参考文献一覧】**

- (1) 郷土かるた館「全国の郷土かるた 栃木県」  
<http://taki-forest.my.coocan.jp/karuta/karuta-32.html> 2017年8月25日閲覧
- (2) 郷土かるたに関する研究・情報は筆者が運営するNPO法人日本郷土かるた協会サイトを参照されたい。「日本郷土かるた協会」トップページURL <http://kyoudo-karuta.com/>
- (3) 原口美貴子「白鷗大生と取り組んだ「小山かるた」づくりの実践報告ー小学校社会科近な地域（郷土）に関する学習の指導力育成をめざしてー」白鷗大学教育学部論集第9巻第2号、2015年11月、pp.411-439。
- (4) 奥澤信行「地理学習におけるフィールドワークの重要性」白鷗大学教育学部論集第11巻第2号、2017年7月、pp.291-304。
- (5) 峰地光重著作集刊行会『新教育の原理と実際』峰地光重著作集第7巻、けやき書房、1981年、pp.315-320。